

20 年先

20 YEARS LATER

株式会社橋梁メンテナンス
President,
KYOURYOU MAINTENANCE, INC

代表取締役社長
富澤光一郎
TOMIZAWA Koichiro



コロナ禍

この原稿を執筆しているのは8月で、新型コロナウイルス感染は緊急事態宣言により一時鎮静化したと思われましたが、再び感染者が増加しており第2波といえる状況の中にあります。2019年12月に中国で発生した新型コロナウイルス感染は、瞬間に世界中に広がり、8月末時点で感染者は二千五百万人、死者は八十数万人に及んでいます。日本においても六万人以上の感染者と千人以上の死亡者が確認されており、プロ野球などのスポーツや、ライブコンサート、演劇、飲食店や観光など、経済や社会生活に大きな影響をもたらしています。新型コロナウイルスの影響で東京オリンピックが延期されるなど誰も予想していなかった事態にもなりました。

これまでウイルスや細菌による感染症は何度となく世界を襲っています¹⁾。ペスト、天然痘、コレラ、インフルエンザなどがすぐに頭に浮かぶかもしれません。近いところでは20世紀初めのインフルエンザ感染拡大（スペイン風邪）では五千万人以上が死亡したともいわれています。現在でも比較的新しい感染症としてコロナウイルス以外でエボラやエイズが発生して、限定的ですが感染が続いています。これまでに完全に根絶できた感染症は天然痘だけです。コロナ後の新しい日常（ニューノーマル）としてwithコロナがこれからの生活様式であるといわれていますが、with感染症が人類の歴史であるともいえるのではないのでしょうか。

感染症の拡大は社会のあり方にこれまでも当然ながらインパクトを与えてきました。14世紀のヨーロッパにおけるペストは荘園制度を解体（農奴解放）しましたし、19世紀の同じくヨーロッパではコレラにより都市スラムをなくす都市改造が進みました。また、第1次世界大戦後のドイツへの賠償交渉で穏健派だったアメリカ大統領ウィルソンがインフルエンザ（スペイン風邪）に罹患

したため、フランスなどの強硬派が力を得てドイツへの講和条件が厳しくなり、ドイツ国内の不満が高まりヒトラーが台頭して第2次世界大戦に発展したなど、風が吹けば桶屋が儲かる的な説もあります。

これまでの感染症対策は「隔離・閉鎖・廃棄」でした。現在でいうと「ソーシャルディスタンス・消毒の徹底」といったところでしょうか、基本は変わっていません。感染が拡大しているときは人と人が接触しないように皆が務めていますが、収束した後は以前と変わらない生活に戻っています。今回のコロナウイルスも感染が収束してきてワクチンや治療薬が開発されればソーシャルディスタンスは意識されなくなるでしょう。人と人が距離を取り続けることは人間社会にそぐわないことであると思います。しかし、コロナ感染をきっかけとして大きく広まったテレワーク、リモート会議は、元に戻ることはなく活用されていくことになると思われます。通勤といった義務的な移動や会議のための移動などを減らすことにより時間、労力が節約でき、仕事や生活の選択肢やゆとりが得られ、それにより新たな生活様式や企業活動の可能性が見だされていくのではないのでしょうか。感染症は社会を変化させる原因ではなく、来たるべき変化を加速させるきっかけであるといえます。本編が発行される際には感染が収束して新しい日常が始まっていることを望んでいます。

20年後のビジョン

こんな逸話を覚えています

夏の日のヨーロッパ。ナポレオンは自軍兵士が街道を行軍しているのを見つめていた。強い日差しの中の行軍で兵士たちは体力を消耗しているようであった。ナポレオンは副官を呼び、「街道沿いに木を植えて木陰を造り、行軍が少しでも楽になるようにしなさい」と指示を出し

た。「それには20年以上掛かってしまいます」と、副官は言外に無駄だと言っているように返答すると、ナポレオンは「その通りだ。だからすぐに取り掛からなければならないのだ」と、言ったとか。

この逸話はあまり正確でないかもしれませんが。かなり若いころに何かで読むか、聞いたのでしょうか、はっきり覚えていません。創作かもしれないし、別の誰かの話を取り違えている可能性もありますが、最後の言葉が妙に記憶に残っています。人の上に立つ人物はこういう考え方をするものかと子供心なりに妙に感心したのだと思います。

そんな逸話を思い出して、自分も20年先を考えて何か出来ているだろうかと時々問いかけていましたが、国土交通省が2020年6月に、今後20年間の道路政策の方向性を示すビジョン「2040年 道路の景色が変わる」を発表したと雑誌の記事で読みました^{2), 3)}。ポストコロナの生活様式や社会経済の変革を見据えながら、概ね20年後の日本社会を念頭に中長期的な政策の方向性を示しているとのこと。この中のビジョンでは5つの将来像を予測しています。

- ① 通勤帰宅ラッシュが消滅
テレワークやホログラム（投影）技術などにより通勤などの義務的な移動が激減する。
- ② 公園のような道路に人が溢れる
単に移動する空間ではなく、楽しむ移動や楽しむ滞在ができる道路空間が生まれる。
- ③ 人・モノの移動が自動化・無人化
自動運転車の普及により安全な道路空間が出現、マイカー所有のライフスタイルが過去のものになる。
- ④ 店舗（サービス）の移動でまちが時々刻々と変化
飲食店やスーパーなどの小売店舗型サービスが道路を移動して営業するようになる。
- ⑤ 災害時に「被災する道路」から「救援する道路」に
耐災害性能が強化された道路ネットワークは災害発生時に災害モードに切り替わり、人命救助、被災地の速やかな復旧に力を発揮する。

ビジョンの詳しい内容は国土交通省のホームページをご覧ください。道路の目的は車両通行のための機

能を高めるだけでなく、生活のゆとりを求めるというように考え方が変化してきているということでしょう。

市街地の道路については道路が公園のようになるという理想をビジョンとしたもので、大阪市が御堂筋を37年ごろに全面歩道化する構想もビジョンの方向性に沿う動きであると思います。テレワークの普及など生活様式の変化とそれにより生まれた余裕があってこそ実現できるビジョンでしょう。

一方、地方の山間部などの道路は、豪雨による土砂崩れなどで通行ができなくなる恐れがあります。地域が孤立したニュースを災害が発生する度に耳にします。対策として耐災害性を強化するという考えも必要かもしれませんが、新たな交通手段により危険な道路が不必要になる可能性というのも、夢があって面白いかもしれないと考えたりしました。

20年という近いようで遠く、正確に見通すことは難しい時間かもしれません。だからこそ、将来の予測を立て、あるいは夢を盛り込んだ目標、ビジョンを立てるには適した時間なのかもしれません。当然ながら、未来は必然的にもたらされるものではなく何か意思決定を積み重ね、アクションを起こさなければ創ることはできないものであることも事実でしょう。

橋梁メンテナンスについて

1986年に（株）総合メンテナンスと（株）中京メンテナンスの2社が発足しました。総合メンテナンスは技術開発やフランス製シーパックジョイントの輸入を主な業務とし、中京メンテナンスは補修工事の施工やシーパックジョイントの販売、施工を主な業務としておりました。総合、中京メンテナンスは、橋梁の維持・補修工事が大きな市場になるとの予測のもと、それに対応すべく設立した会社です。まさに20年先を見越して設立した会社といえます。

2社は将来1本化して本格的な活動をするための準備的な会社でした。というのも、当時は新設工事が順調で、補修工事を積極的に請負う会社はほとんどなく、利益も望めない業種という認識であったからです。

そのような中でも同業他社が少しずつ増えてきました。それに対抗すべく、総合・中京メンテナンス2社は1994年に効率的な経営、競争力強化を図るため合併して（株）橋梁メンテナンスとなりました。

翌年1995年、阪神大震災が発生し、その影響により耐震基準が見直されて橋梁の耐震補強工事が活況を呈するようになり、橋梁メンテナンスも工事部門が大きく発展しました。しかし、採算の合わない工事も多く、補修工事から撤退する会社も少なくありませんでした。橋梁メンテナンスも2008年、工事部門を切り離して伸縮装置（シーパックジョイント）販売の専業と生まれ変わりました。総合・中京メンテナンスを設立して22年後のことです。設立時のビジョンから方向性が変わりましたが、これも社会状況などに応じて柔軟に対応してきた結果だといえると思います。

その後はフランスより輸入していたシーパックジョイントWdタイプの鋼棒による定着構造を変更して孔明きジベルによる定着構造としたKMAジョイント販売が好調で業績を伸ばしてきました。KMAジョイントは国内製造で改良を重ねている製品です。とにかく伸縮装置の売り上げを上げていかなければ会社がなくなるという危機感を社員は持ち、仕事に取り組んできました。伸縮装置専業として将来のビジョンをどのように描いていたか、あるいはそのような余裕はなかったのかもしれませんが、伸縮量100mm以上の大型伸縮装置では1/3のシェアを占めるまで成長しました。しかし、専業となって13年がたち、伸縮装置市場が漸減傾向にある状況の中、新たにビジョンを描き、行動を起こさなければならない時期にきていると思います。



KMAジョイント (KMA-230)

おわりに

ナポレオンは1813年ライプティヒの戦いで大敗して、皇帝を退位、エルバ島へ追放されます。しかし、翌年には島を脱出して皇帝に振り返りますが、ワーテルローの

戦いで再び敗れ、ナポレオンの復位は幕を閉じます（百日天下）。そして、大西洋の孤島であるセントヘレナ島に幽閉されてその生涯を閉じることになります。ナポレオンは若い時より波乱万丈の人生を歩んでいます。ナポレオンのように明日の戦いを考えながら20年後を想い、準備することがわれわれにも常に求められているのだと思います。感染症や災害など不測の事態は、社会活動を停滞させますが、社会の変化を加速します。20年先のビジョンを描き、なおかつ社会の変化に柔軟に対応していくことが必要です。様々な日々の課題に取り組みながら、将来、実がなるような種を撒くことができれば幸いと考えています。

さいごに、新型コロナウイルス感染症により亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、残されたご家族にお見舞い申し上げます。また、医療関係者や社会活動の維持に努力されている皆様に改めて感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 小田中直樹：感染症はぼくらの社会をいかに変えてきたのか、日経BP社、2020.7.
- 2) 日経コンストラクション、2020.8.10
- 3) 「2040年、道路の景色が変わる」～人々の幸せにつながる道路～ 国土交通省HP